35

小島蕉園の『蕉園漫筆』

松岡　尚則[1,2,3]，安部　郁子[3]

[1] 東邦大学総合診療・急病講座，[2] 高知総合リハビリテーション病院，[3] 公益財団法人 研医会図書館

【緒言】小島蕉園（1771～1826）は，狂歌師で有名な唐衣橘州（小島恭従）の息子として明和8年生まれた．幕臣であり，文化2年田安領甲斐田中の代官となり，仁政で領民の信頼をうけた．4年職を辞し，徳本流の町医者となった．文政6年悪政のため一揆がおこった一橋領遠江相良の代官にむかえられた．文政9年1月19日死去した人物である．小島蕉園は幕臣という面もあるが，それだけに留まらず，医師という一面も持つ人物でもある．そこで，小島蕉園が著した『蕉園漫筆』の解析を行うこととした．

【方法】『蕉園漫筆』を読み，調査した．

【結果】慶応大学所蔵の『蕉園漫筆』（和　医書門五十三号一冊）は写本で外題が『蕉園謾筆』，内題が『蕉園漫筆』であった．慶應大学はグーグル社とGoogleブック検索図書館プロジェクトを提携し，図書館蔵書のデジタル化を進めており，この慶應大学蔵の『蕉園漫筆』は，インターネット上でも読むことが可能となっていた．

小島蕉園の名は恭之，彝．字は公倫．通称は源一．徳本流である小島蕉園は，「本邦，傷寒論ヲ読モノ濫觴ハ徳本ト云ヘシ自書ノ医弁ト云モノノ中ニ古今ノ医書，皆反古文，只傷寒論ヲ読テ足ルト云コトアリ．サテ医古文モ本邦ノ名人ト云格別ノ見識ト云ヘシ世上ノ人名護屋玄意ヲ傷寒論の祖ト云ハ徳本ヲ知ラヌ人也.」とし，永田徳本を主軸に置いていた．

小島蕉園によって書かれた『蕉園漫筆』には，吉益東洞（1702～1773）や村井椿壽（1733～1815）について具体的なエピソードを記載していた．一例として，『蕉園漫筆』では，「村井椿壽，東洞ノ門下ニ有シ．カツ一婦人両眼飛出シメ筋ヲ引テ難儀スレド医薬効ナシ．先生ノ治ヲ乞ト云．門人皆処方シテ翁ハアトニテ処方ス．諸門人ノ方皆アタラズ．翁ノ云ケルハ椿壽ハ定テ処シ得ヘシト云テ見ラレシニ同ジクアタラズ．翁ハ桃承気タリ．椿壽ハ却テ翁ノ処方覚束ナシト云ヘバ，翁ノ曰コノ湯ニテナケレバ治セヌ．腹状之爾ノ処方コソ治スベキ非ズ尓．我ニ随フコト諸弟子ヨリ久シ．然ルニ如ノミニ非ズ．我方マデ疑フハ似合ザルコト之医術ハ止メヨト大ニ怒リシニ，椿壽イヨイヨ心中疑ヒアリテ，翁ノ処方ニテハ決シテ愈ヘズト云ニ付，遂ニ一度ハ塾ヲ逐レケリ．此病人，翁ノ薬ヲ服スルニ随ヒ漸ニ眼ヲミテ数日ノ間ニ愈タリ．椿壽コレヲ聞テ大ニ愧入テ諸門人ニタノミテワビ入又塾ニ入ント云．予少年比キシ嘶シナリ．翁ノ術感ズベシ.」というエピソードを紹介していた．また，小島蕉園の家には，『薬徴』の草稿があり，東洞30位頃，文章拙く文字の錯置も多かったけれども，都で刊行する所の今の『薬徴』と相違するところがなかったとしていた．また，『蕉園漫筆』の中では，東洞の著作『類聚方』，『方極』，『薬徴』，『医断』，『建珠録』について，書評が書かれていた．

【総括】亀井南冥が東洞の門を五六日で「英雄嘯くなり」と，辞めたことは有名である．小島蕉園『蕉園漫筆』には，村井椿壽も東洞の門を辞めた経緯が書かれていた．一旦は辞めたものの，吉益東洞の臨床能力の高さから，村井椿壽は，人を立てて再入塾していた．

小島蕉園の医術は，徳本流とするものの，「鷓鴣菜湯」を用いている．「鷓鴣菜湯」は松原一閑斎の「海人湯」に由来する処方で，吉益東洞や山脇東洋が改良した寄生虫に対する処方である．こうしたことから，小島蕉園の医術は単なる徳本流というのみならず，その時代の処方を取り入れた流派であったと考えられた．